

氏名	桂 雯
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8871 号
学位授与年月日	平成 30 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	普通話との対照から見た広東語

主査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	池 田 潤
副査	筑波大学 教授	博士（文 学）	臼 山 利 信
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	小 野 正 樹
副査	筑波大学 准教授	文学博士	金 仁 和
副査	筑波大学 助教	博士（文 学）	池 田 晋

論 文 の 要 旨

本論文は、広東語の特徴を、普通話（中国北方方言を基礎とした共通語）と対照しながら、音声・音韻、形態論および統語論の側面から包括的に考察したものである。広東語は、中国国内の主に広東省、香港とマカオ、および広西チワン族自治区と海南省で使用されている。広東語は中国大陸では方言とされるが、香港とマカオでは公用語として使用されている。また、広東系の華僑が多く移住している東南アジアのシンガポール、マレーシア、フィリピン、ベトナム、インドネシア等では主言語として、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等の華僑社会でも広く使用されている。中国では言語と文字に関する法令により出版物や公的掲示の場合は一般に普通話が使われるため、広東語は基本的に話し言葉としてしか使用されないが、使用地域と使用者数から見て、広東語は最も幅広く使われている方言である。広東語は 文法的構造等は普通話とよく似ているが、話し言葉においては普通話と意思疎通しにくい。たとえば、音声・音韻の面では普通話の 4 つの声調に対し広東語には 9 つの声調がある。こうした相違点は音声・音韻面だけでなく、形態論、統語論の面でも多々ある。広東語の特徴を包括的・体系的に理解するために、まず、広東語に関する先行研究を整理し、これまでの研究成果を通して広東語研究の現状を理解した上で、先行研究で残された課題や疑問点のいくつかを普通話との対照という方法で究明するのが本論文の狙いである。

本論文は 7 章からなる。第 1 章は序論で、本論文の研究背景、目的、構成が述べられる。

第 2 章では、先行研究を辞書および概論的研究、音声・音韻、形態論、統語論の 4 つの分野に分け、広東語研究の先行研究で残された諸問題を拾い上げる。その中から著者が着目した課題は次の 4 つである。

- (1) 入声韻尾は日本語の促音生成にどのような影響を及ぼすのか（音声・音韻）
- (2) 重ね型形容詞の派生にはどのような形式的、意味的特徴があるのか（形態論）

(3) 構造助詞と状態詞接尾辞の用法は位置によって異なるのか (統語論)

(4) 枠構造において文末語気助詞はどのような役割を果たすのか (統語論)

第3章は、広東語の音韻上の大きな特徴である入声韻尾から日本語の促音生成への影響を明らかにする。入声韻尾と促音との類似性については先行研究で裏付けられているが、本論文では広東語母語話者が生成する促音語の入声韻尾による干渉の様相を実証的に検証するために、日本語母語話者(10名)、中国北方方言母語話者(14名)、広東語母語話者(15名)を実験協力者として促音と入声韻尾の発話を録音し、音響解析を行う。そして日本語母語話者が生成した促音を基準とし、北方方言母語話者と広東語母語話者の促音を対照し、広東語母語話者が生成した促音における入声韻尾の干渉を定量的に観察する。その結果、広東語母語話者は促音語を生成する際に入声語の影響を受け、促音の後続母音を伸ばす傾向があることが究明される。

第4章では、先行研究をふまえて重ね型形容詞をAA型、ABB型、AAB型、AABB型、ABAB型、Nss型、ppV型等(Aは単音節語、ABは二音節語、Nは名詞、Vは動詞、pは接頭辞、sは接尾辞を示す)に再分類した上で、コーパスも活用して語彙数、語形成、文法機能(定語、状語、述語、補語など)、意味(描写性、イベント性、多量性)という4つの側面を広東語と普通話とを対照する。さらに、一語内に異なる感覚的意味を持つ語(触覚、視覚、聴覚的意味をもつ「粗」など)を感覚共有語と呼ぶ先行研究をふまえて、ある語が何種類の感覚的意味を持つかを感覚共有性と呼び、単音節形容詞が重ね型形容詞になった後の感覚共有性の変化について広東語と普通話とを対照する。その結果、①広東語、普通話ともAA型は重ね型になっても感覚共有性は変わらないが感覚の程度が小さくなること、②Ass型は普通話では重ね型になると感覚共有性が弱まり、広東語では感覚共有性が完全に失われること、③ppA型については、広東語には感覚共有語をAとする例が存在せず、普通話では重ね型になると感覚共有性が弱くなり、使用対象も狭くなることを明らかにしている。

第5章と第6章は統語論的視点からの対照である。広東語の特徴である構造助詞と状態詞接尾辞、文末語気助詞に着目し、第5章では普通話の定語(連体修飾語)の構造助詞「的 de」と状語(連用修飾語)の構造助詞「地 de」、および広東語でそれらに対応する定語の構造助詞「嘅 ge」と状語の構造助詞「噉 gam」を分析対象とする。また、状態形容詞が述語と補語として使用される際には、普通話では状態詞接尾辞「的 de」、広東語ではそれに対応する状態詞接尾辞「噉 gam」が現れるため、これも分析対象に加える。これらと重ね型形容詞との共起状況をコーパスも活用して分析することで、著者は広東語の「嘅 ge」「噉 gam」の文法機能について次の3点を明らかにしている。①重ね型形容詞が定語になる場合、普通話の「的 de」も広東語の「嘅 ge」も形容詞に必ず後続する。②重ね型形容詞が状語になる場合も、普通話の「地 de」と広東語の「噉 gam」の間に違いはない。「地 de」と「噉 gam」が必ず後続する形容詞と後続してもしなくてもよい形容詞がある。③重ね型形容詞が述語と補語になる場合は、普通話と広東語が異なる傾向を見せる。すなわち、普通話の「的 de」の必要度は重ね型のパターンに応じて段階的に変化するが、広東語の「噉 gam」は現れない方が自然で、「噉 gam」を伴うと話がまだ終わっていない印象を与える。その要因として、著者は広東語の重ね型形容詞の強い状態性と、指示詞から虚化された「噉 gam」の連結機能を挙げる。

第6章は、意味が同じか近い前置成分と後置成分が入れ子的に対応する「枠構造」で文末語気助詞が果たす役割を扱う。普通話では枠構造の前置成分がより重要な文法的役割を担うのに対して、広東語では枠構造の後置成分がより重要な文法的役割を担うとされてきたが、言語データをもとに実証されたとは言い難い。著者は、文末語気助詞による枠構造のうちこれまで十分に研究されていない広東語の「点解 dimgaai A 嘅 ge2」と普通話の「难道 nandao A 吗 ma」を対象として分析を行い、普通話の枠構造の中心が必ずしも前置成分ではないこと、および広東語の枠構造の中心が後置成分であることを、实例を通して明らかにしている。

第7章は本論文のまとめであり、結論とともに今後の展望が述べられる。

審査の要旨

1 批評

本論文の主眼は、言語学的観点から著者の母語である広東語に対する理解を深めることにある。そのための方法は多々あるが、方言である広東語を中心に据えた先行研究が普通話ほど多くないという事実と広東語を普通話と対照しながら考察する研究も多くないという事実をふまえ、著者は普通話との対照という方法を選択した。これは、普通話に関する豊富な先行研究を活かすことができるという点と、他の言語と比べることで広東語を観察しただけでは気付きにくい洞察を得ることができるという点で秀逸な選択であったと言える。

本論文の学術的意義は大きく分けて3つある。まず広東語の特定の側面に絞らず、音声・音韻、形態論、統語論にわたり幅広く広東語の全体像を扱ったこと、次に広東語の特徴を音響実験やコーパス分析を通して実証的に考究したこと、そして普通話との対照という方法によって広東語を観察しただけでは気付きにくい洞察を得ることができたことである。例えば、第3章で扱った入声韻尾は日本語の促音と類似していて、従来、広東語母語話者が促音語を生成する際に入声韻尾から正の干渉を受けていると言われてきたが、本論文は日本語母語話者、中国北方方言母語話者、広東語母語話者の発話の音響解析を通して普通話と対照しないと気づかない新たな音声的特徴、すなわち広東語には後続母音が不自然に伸びる特徴があることを実証し、これが実は負の干渉であるという新たな知見を導くことに成功している。また、第5章ではコーパスを活用して定語、状語、述語、補語の文法的マーカーとしての構造助詞と状態詞接尾辞の統語的分析を行なっているが、その際に重ね型形容詞が第4章で論じた語形成の類型によって定語、状語、述語、補語になることを踏まえて、両者の共起状況について形態論ないし統語論の一方に絞ってはいけないう知見を得ている。これらに例示されるように、上記3つの学術的意義が相乗効果を生んでいる点が本論文の大きな特徴である。

なお、著者自身が述べているように、第3章の音響データについては広東語母語話者が入声語と促音語に先行する母音を短くしているという解釈も可能で、さらなる検討の余地が残る。また、普通話の「的 de」と「地 de」にも広東語の「嘅 ge」と「噉 gam」にも第5章で扱ったもの以外にさまざまな文法機能があり、本論文はそれらを捨象した部分的対照にとどまっている。著者自身が結論で述べているように、今後、これらの文法機能も視野に入れた対照を行い、広東語の特徴をいっそう明らかにしていく必要がある。しかし、これらは本論文の成果をふまえて研究を推進することによって将来解決すべき問題であり、学位論文としての価値を損なうものではない。

2 最終試験

平成30年10月29日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審査の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受ける十分な資格を有するものと認める。